神奈川県立歴史博物館
Kanagawa Prefectural Museum of Cultural History

論題	神奈川県立歴史博物館所蔵の骨角器 ―林國治氏、赤星直忠氏旧蔵の横浜市称名寺貝塚採集資料―
著者	高橋　健・千葉　毅
掲載誌	神奈川県立博物館研究報告―人文科学―　第 43 号
ISSN	0910-9730
刊行年月	2016 年（平成 28 年）12 月
判型	A4（210mm × 297mm）

【資料紹介】

神奈川県立歴史博物館所蔵の骨角器

― 林國治氏、赤星直忠氏旧蔵の横浜市称名寺貝塚採集資料 ―

高橋　健
千葉　毅
（横浜市歴史博物館）

【キーワード】
称名寺貝塚　骨角器　銛頭　縄文時代

【要旨】
神奈川県立歴史博物館が所蔵する横浜市称名寺貝塚採集骨角器の報告を行なった。これらは林國治氏、赤星直忠氏旧蔵資料である。
今回報告した二十五点の資料は、現在称名寺A貝塚とされている地点から採集されたものである可能性が高い。銛頭、釣針、有尾刺突具などの狩猟漁撈具のほか、針や垂飾、貝輪、貝刃などが含まれる。銛頭三点は、縄文時代後期初頭から中葉に位置づけられる。大型の銛頭は角座骨を含めた素材取りに特徴があり、その製作技術的な系譜や編年上の位置づけが注目される。

はじめに

神奈川県立歴史博物館では、その前身となる神奈川県立博物館の一九六七年の設立以来、県内の考古資料の収集に努めてきた。現在、当館ではそれらの整理作業を進めており、整理が進んだ資料から順次公表を行なっている。

本稿では、横浜市称名寺貝塚採集の骨角器の報告を行なう。これらは林國治氏及び赤星直忠氏により採集され、その後当館に収蔵された資料である。

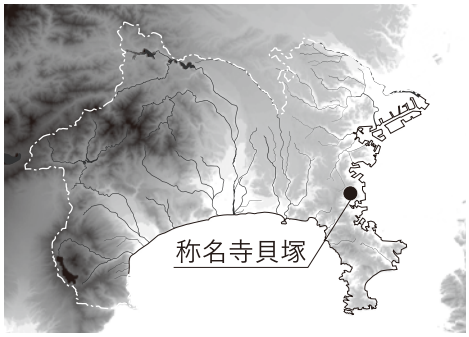
（千葉）

一　林國治氏旧蔵資料

（1）資料の概要

林國治氏は戦前戦後にかけて、横浜市域を中心に考古資料の採集を精力的に行なっていた在野の考古学研究者である。現在、林氏が採集した資料の大半は当館に収蔵されている。

林氏は昭和二〇年代に数回にわたり称名寺貝塚を訪れており、土器、土製品、石器、骨角器、動物遺体等を採集している。これらのうち土器、土製品については既に報告を行なった（千葉二〇一五）。これらの土器群は、吉田格氏による称名寺貝塚の発掘調査及び称名寺式設定の契機となったものでもあり、学史的に重要な資料であった。今回報告する骨角器については、資料への個別の注記がなく詳細な採集時期は不明であるが、基



第１図　称名寺貝塚の位置

本的には同時期に採集されたものと考えている。

当館が所蔵する林氏採集の称名寺貝塚採集骨角器には、紙箱で保管されていたものと（写真1）、個別に保管されていたものがある。

前者は、林氏が称名寺貝塚で採集した動物遺体が保管されている木箱に収まっていた。紙箱には「称名寺貝塚　骨角器」とマジックで注記されており、箱の中には十三点の骨角器とともに「称名寺貝塚」と記されたメモが収納されていたことから、これらの骨角器は称名寺貝塚で採集されたものである可能性が高い。ただ、それらの中には「三ツ澤貝塚」と注記された骨角器も混在していたことから、全てが称名寺貝塚採集のものではない可能性がある。そのため本稿では、注記から明らかに他の遺跡で採集されたと判断される資料および細片を除いた七点の資料を報告する。

後者は、称名寺貝塚採集資料として個別に当館に登録されているもので、骨角器が十一点、貝製品が五点ある。

（千葉）

（2）紙箱で保管されていた資料（第2図、写真2）

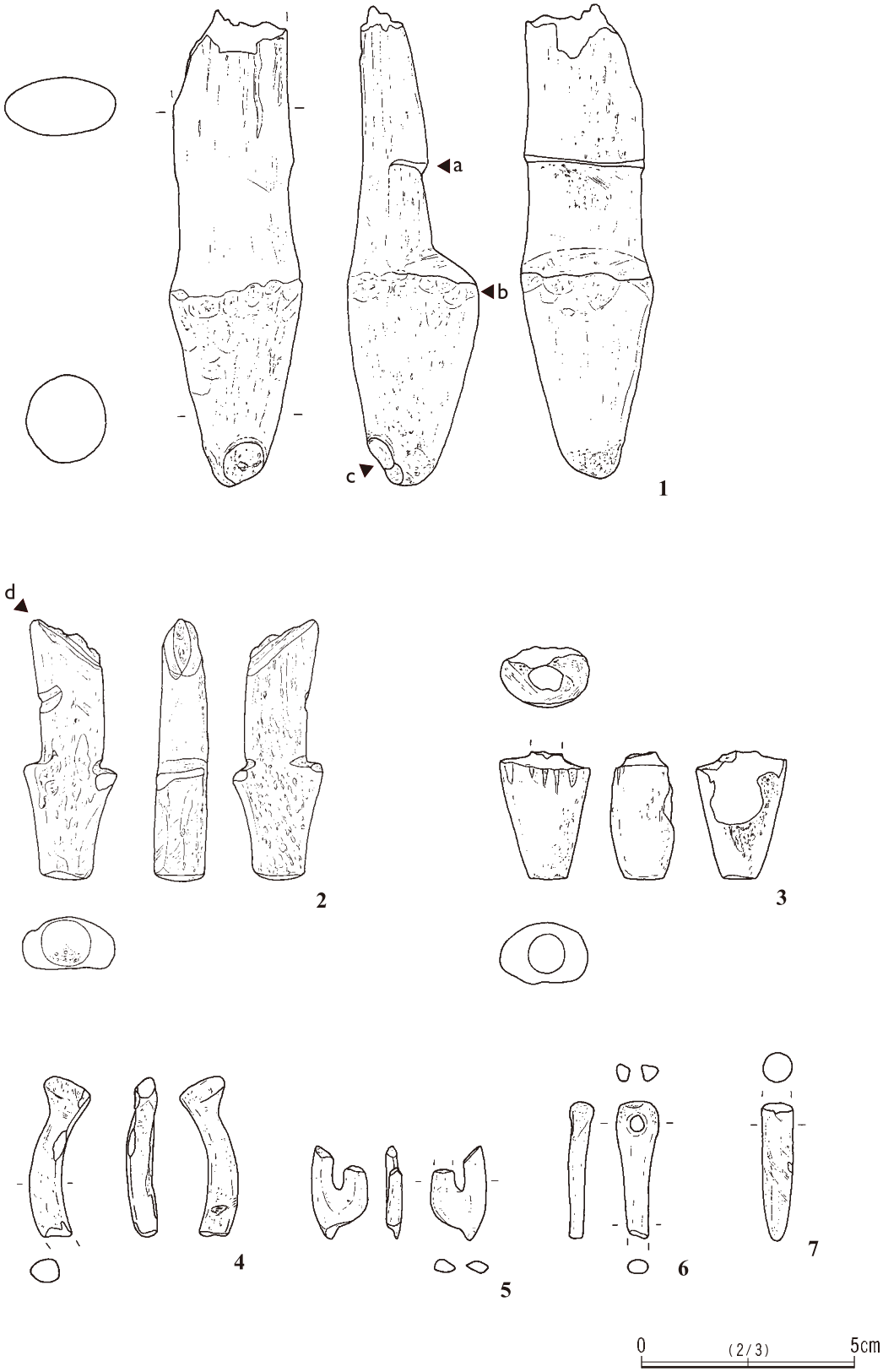
1～3は鹿角製で雄形・鉤引式の銛頭である。全て基部の破片であり、逆鉤を残すものはない。

1は「稱名寺貝塚」の注記を持つ。本来一五cmを優に超える大型品だったと考えられる。表面側（図左）に鹿角表面の溝、裏面側には海綿質がみられる。軸部の断面は扁平な楕円形であり、索肩が大きく突き出している。索肩の突出方向（図中央の右側）に「片側交互」に逆鉤がついていたと推測される（第6図エ）。軸部の根元に浅い段をもち（▲a）、幅広の溝を入れたようになっている。繋索（銛縄）の装着と関係するものであろう。基部は逆円錐に近い形状であるが、表面は平滑に仕上げられておらず、特に索肩の近くでは不整な小平面が連続する（▲b）。端部は鈍頭になっている。称名寺式期の銛頭にしばしばみられる、繋索（銛縄）を通すための索肩の抉りは設けられていない。

この資料は素材取りに特徴がみられる。海綿質は軸の裏面側で顕著だが、基部ではほとんど確認できない。素材に角幹部を利用したのであれば、中心部にある海綿質の組織を表面のどこかに確認できるはずである（今回報告の2・3などと比較すると分かりやすい）。注目すべきは、基部端近くに残る小凹面である（▲c）。これは原材の自然面であるが、鹿角そのものにはこのような凹面をもつ部分はなく、シカ頭蓋骨の内面にあたると考えられる（写真3）。したがって、この銛頭は鹿角の角幹部から角座骨にかけての部分を利用して作られたものである。

2は、上端部に擦り切りによる斜位の切断痕が残る資料である（▲d）。鹿角表面の溝（図左）と、裏面側に海綿質を残す。板状の素材から作られており、索肩は両側に張り出している。基部端には平坦面を設けてい

写真1　林氏採集資料が保管されていた紙箱



第２図　称名寺貝塚採集骨角器（1）　林國治氏旧蔵資料・紙箱保管（当館蔵）

写真２　称名寺貝塚採集骨角器（1）　林國治氏旧蔵資料・紙箱保管（当館蔵）

a. 角座骨のついた鹿角（エゾシカ）
b. 角幹部と角座骨（毛皮残存）
c. 頭蓋骨内面の凹凸

写真３　鹿角と角座骨

る。上端付近はおそらく被熱により黒く変色しているが、擦り切りも含めて意図は不明である。

３も鹿角表面の溝と裏面の海綿質を残す。裏面側が破損しているために確実ではないが、索肩は軸の周りを一周するように設けられていたらしい。基部端には平坦面をもつ。

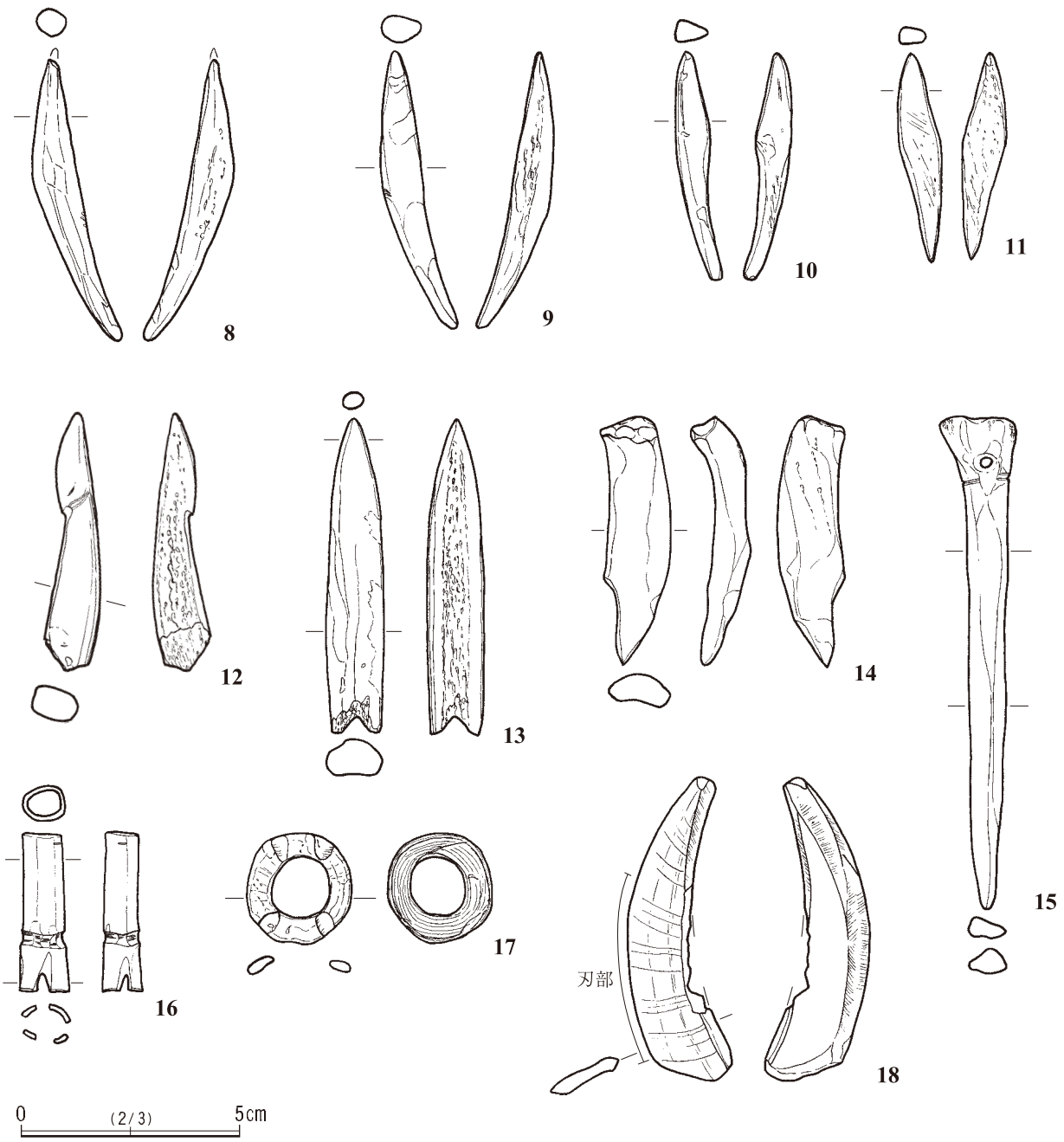
釣針とした資料二点は、いずれも破片である。これまでに称名寺貝塚から出土した釣針をみると、軸頭部は二つの突起をもつタイプが主であり、アグのつき方は内アグ／外アグ／両アグ／無アグの各種がみられる。軸が湾曲する曲軸のタイプが出現するのが特徴である。４はやや湾曲した軸の頂部に突起が一つ付いた大型釣針の破片、５は小型釣針未成品の湾曲部の破片だと推測した。５の突起は外アグになる部分だろうか。

６は有孔の骨針の頭部破片、７は刺突具の先端部破片である。（高橋）

（３）個別に保管されていた資料（第３・４図、写真４）

有尾刺突具が四点出土している（第３図８～11）。いずれも「ノ」の字状の全形をほぼ残す資料である。中央が着柄部、下端が逆鉤として機能したと考えられている。12は先端に逆鉤を一つもつヤス先の破片である。今回報告する資料には、多段の逆鉤付ヤス（吉田報告の分類による中型銛）は含まれていない（吉田一九六〇）。有尾刺突具が称名寺貝塚の各地点から出土しているのに対して、多段の逆鉤付ヤスはⅠ貝塚からは出土していない。したがって当資料群を一まとまりとみた場合、Ⅰ貝塚にやや近い様相を示しているといえるかもしれない。

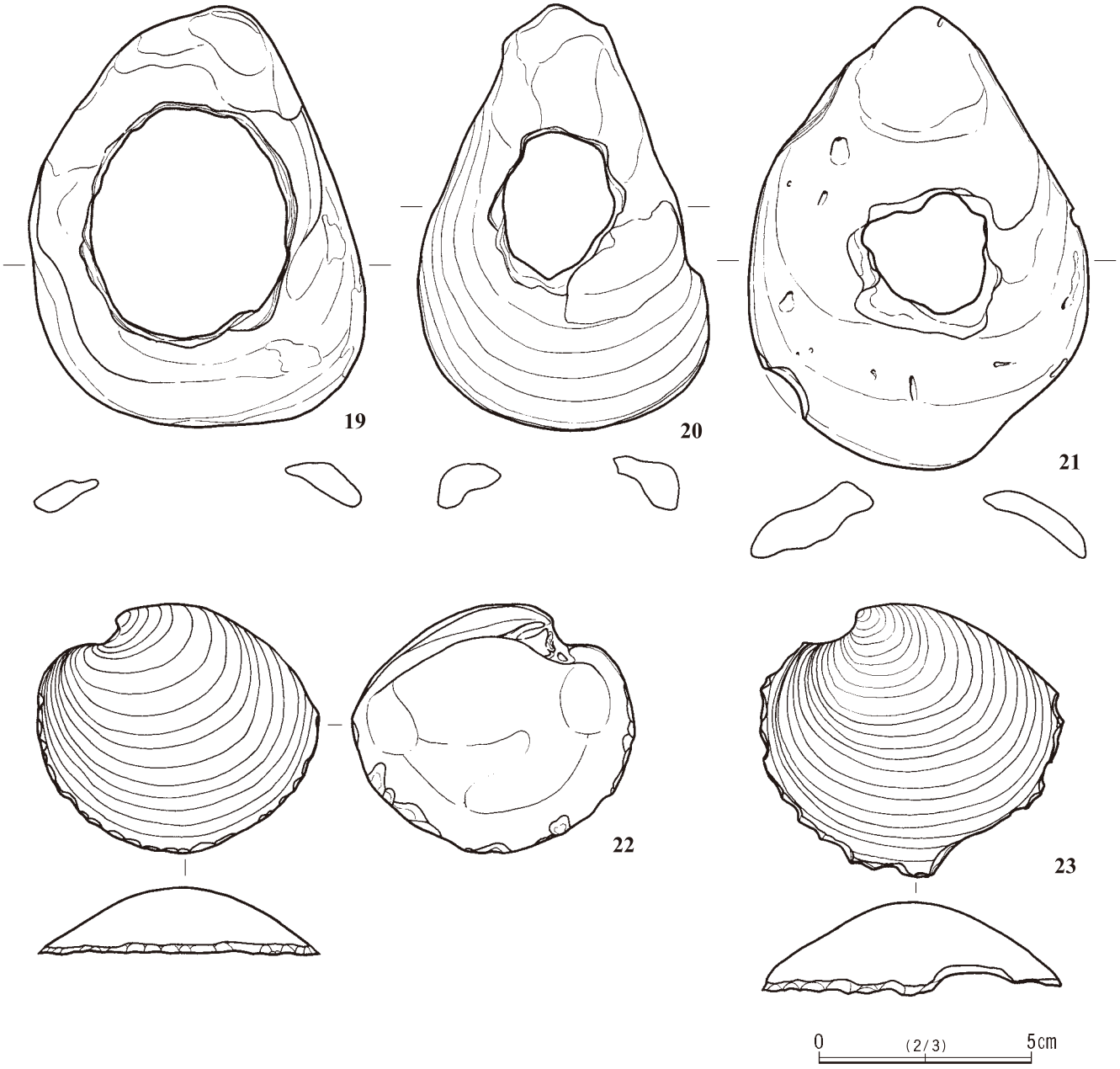
13は刺突具の先端部破片である。14は器種不明としたが、表面の磨耗が著しい骨片で人工品ではないかもしれない。15は有孔の骨針で、ほぼ完形の資料。16は、鳥管骨を切断して一端に溝を巡らせ、四カ所に切込



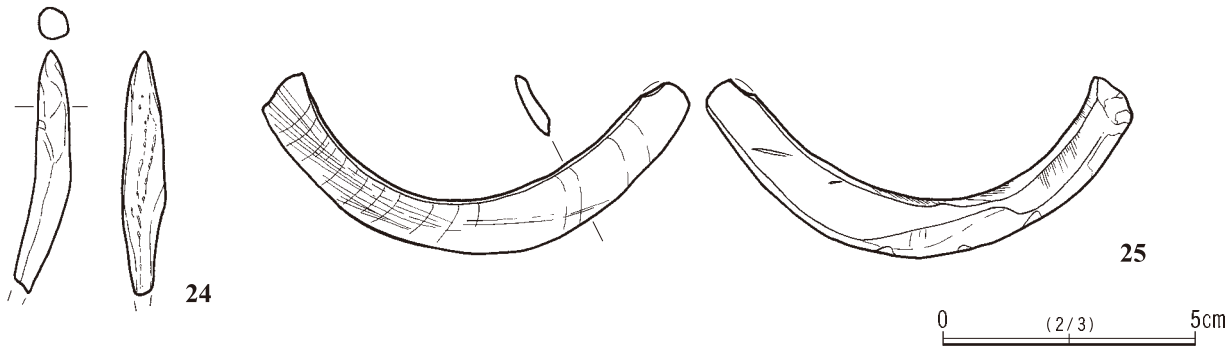
第３図　称名寺貝塚採集骨角器（2）　林國治氏旧蔵資料・個別保管（当館蔵）

を入れている。用途不明だが、垂飾の一種だと考えた。17は環状の垂飾で、サメ椎骨を横方向に分割し、中央に大きく穿孔したものである。サメ椎骨製の垂飾は中央に穿孔しただけの場合が多いが、このように加工されたものは、福島県寺脇貝塚などに類例がある。18はイノシシ牙の加工品である。イノシシの下顎犬歯を素材とし、縁辺を磨いて刃部を作り出している。

貝製品としては、貝輪と貝刃がある。貝輪はイタボガキ製のものが三点である（第4図19～21）。20は「昭和二□・十二・二四　稱名寺門内」の注記を持つ。一部読めないが、前号で紹介した土器と同じ昭和二五年十二月二四日に、林氏によって採集された資料であろう。穿孔が小さい二点は未成品であろう。称名寺貝塚からは過去の調査によってもイタボガキ製の貝輪が多く出土しており、千葉方面の貝塚において中期に盛行したイタボガキ製貝輪が後期にベンケイガイ製に置き換わるのとは異な



第４図　称名寺貝塚採集骨角器（3）　林國治氏旧蔵資料・個別保管（当館蔵）



第５図　称名寺貝塚採集骨角器（4）　赤星直忠氏旧蔵資料（当館蔵）

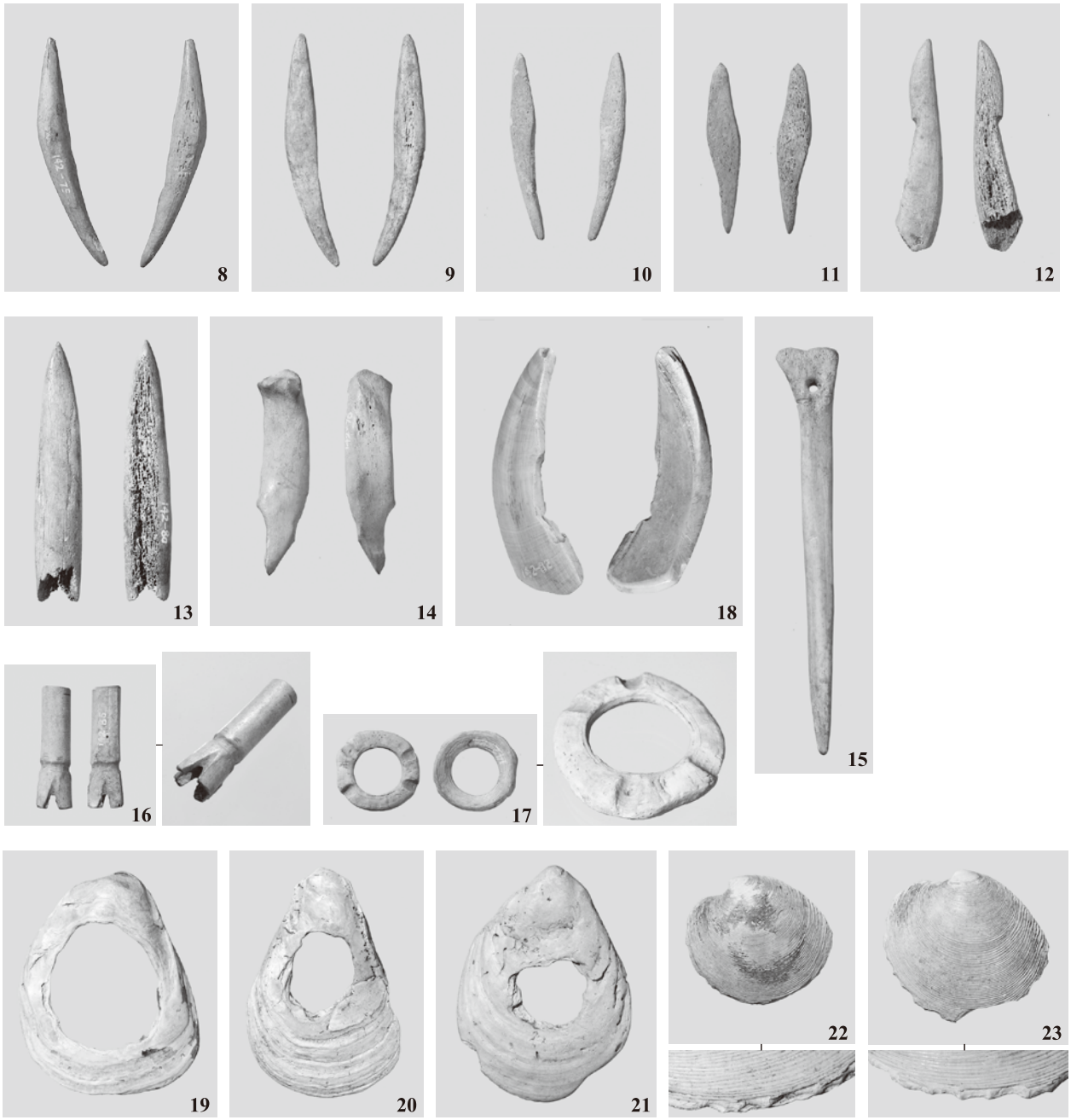


写真４　称名寺貝塚採集骨角器（2）　林國治氏旧蔵資料・個別保管（当館蔵）

写真５　称名寺貝塚採集骨角器（3）　赤星直忠氏旧蔵資料（当館蔵）

った傾向をみせている。貝刃はカガミガイ製のものが二点みられる（22・23）。22は内外面、23は外面に剝離を有する。（高橋）

二　赤星直忠氏旧蔵資料（第5図、写真5）

第5図24・25は赤星直忠氏の旧蔵資料である。赤星氏は大正末期から昭和二〇年代にかけて、数回にわたり称名寺貝塚の調査を行なっているが、当館に収蔵されている資料がいつ採集されたものなのかは現状では確認できていない。

24は有尾刺突具である。尾部をやや欠損する。25はイノシシ牙製のヘラ状製品である。イノシシ下顎犬歯を板状に切断し、縁辺部を整えているが穿孔などはみられない。神奈川県埋蔵文化財センター所蔵の赤星ノート（№二三七）にこの資料の実測図が掲載されており、「横浜市金沢区称名寺内　称名寺貝塚　県立博物館蔵」と注記されている。おそらくこれも現在のA貝塚の出土品であろう。（高橋）

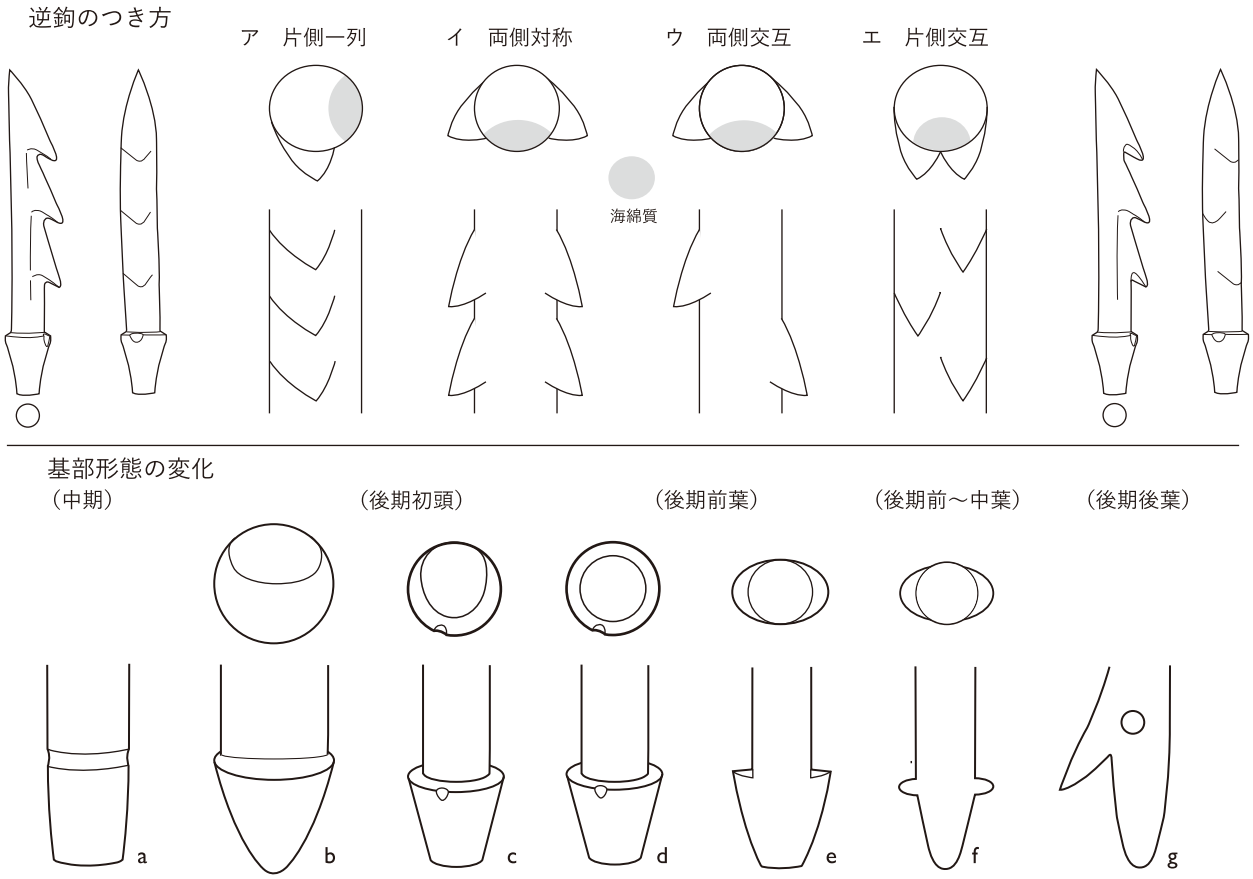
三　銛頭について

今回報告した資料のうち、銛頭に分類されるのは紙箱に入っていた三点である（第2図1～3、写真2－1～3）。第2図1は「稱名寺貝塚」の注記をもつが、地点は記されていない。2・3は注記をもたず、箱から称名寺貝塚出土の可能性があると判断した資料である。林氏は昭和二四年一月に赤星氏によるA貝塚の調査に参加し、三月には個人で発掘を行っている（千葉二〇一五）。また昭和二六年には吉田格氏によるB貝塚の調査にも参加している。林氏による称名寺貝塚発掘資料は、個人でA貝塚を調査した時の出土品である可能性が高い。

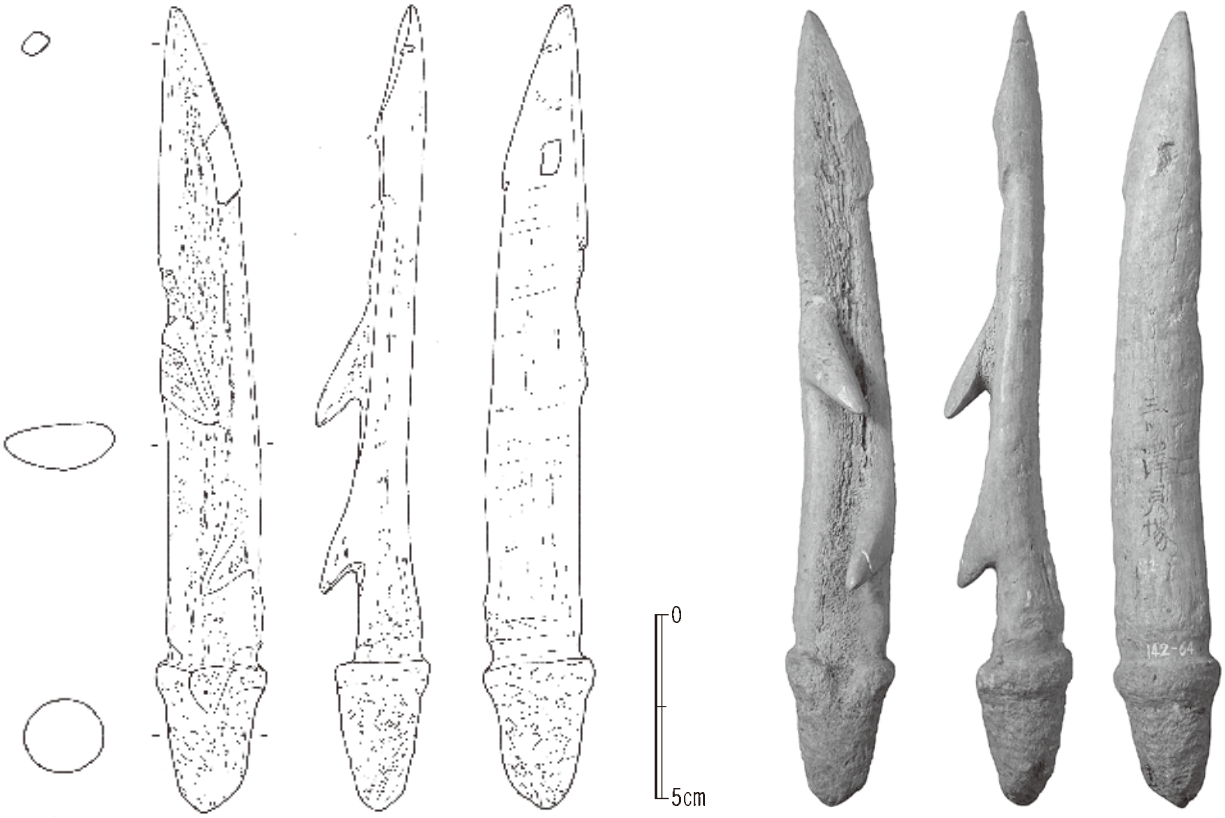
縄文時代の関東地方の銛頭は、基本的には雄形・鉤引式に分類される。

第１表　称名寺貝塚採集骨角器　属性表

図番号	器種	状態	素材	長[mm]	幅[mm]	厚[mm]	重[g]	備考	目録番号	資料番号
林國治氏旧蔵資料										
1	銛頭	頭部欠	鹿角～角座骨	112	32	30	65.1	紙箱入、注記「稱名寺貝塚」	—	—
2	銛頭	基部破片	鹿角	31	21	15	9.8	紙箱入	—	—
3	銛頭	基部（切断痕）	鹿角	61	21	12	5.7	紙箱入	—	—
4	釣針？	頭部破片	鹿角	37	12	6	1.6	紙箱入	—	—
5	釣針？	未成品？	不明	22	13	3	0.6	紙箱入	—	—
6	針	頭部破片	陸獣骨	32	10	6	1.3	紙箱入	—	—
7	刺突具	先端部破片	鹿角	32	7	7	1.2	紙箱入	—	—
8	有尾刺突具	ほぼ完形	鹿角	67	10	8	3.5		142-75	CX0000360
9	有尾刺突具	完形	鹿角	65	9	6	2.5		142-77	CX0000362
10	有尾刺突具	完形	陸獣骨？	53	8	6	1.3		142-78	CX0000363
11	有尾刺突具	完形	鹿角	49	9	4	1.6		142-81	CX0000366
12	逆鉤付刺突具	基部欠	鹿角	59	12	8	3.7		142-79	CX0000364
13	刺突具	先端部破片	鹿角	72	13	8	5.3		142-80	CX0000365
14	不明	摩耗している	陸獣骨	57	15	9	6.1		142-76	CX0000361
15	針	完形	シカ中手中足骨	113	18	5	7.6		142-83	CX0000368
16	垂飾？	完形	鳥管骨	36	9	7	1.9		142-85	CX0000370
17	垂飾	完形	サメ椎骨	25	24	5	1.3		142-84	CX0000369
18	磨製刃器	一部欠	イノシシ下顎犬歯	69	20	5	7.9		142-82	CX0000367
19	貝輪	完形	イタボガキ	99	79	12	45.8	注記「稱名寺門内 昭和二□.十二.二四」	152-16	CX0000432
20	貝輪	未成品	イタボガキ	101	69	9	39.6		152-17	CX0000433
21	貝輪	未成品	イタボガキ	109	81	16	80.4	注記「稱名寺」	152-15	CX0000431
22	貝刃	完形	カガミガイ	59	66	16	25.1		152-27	CX0000443
23	貝刃	完形	カガミガイ	65	71	16	28.8		152-26	CX0000442
赤星直忠氏旧蔵資料										
24	有尾刺突具	完形	鹿角	48	8	7	2.4		142-5	CX0000290
25	へら状製品	ほぼ完形	イノシシ下顎犬歯	84	17	4	6.6		142-6	CX0000291



第６図　銛頭の形態模式図



第７図　三ツ沢貝塚採集銛先（当館蔵）
CX0000349（2-143-65）

すなわち、基部を柄の先端に設けたソケットに差し込む装着方法で（銛頭本体にはソケットを設けない）、獲物の体内に引っかかるための逆鉤をもつ。中期から後期の関東地方南西部の銛頭にみられる逆鉤のつき方と基部形態を模式的に示したのが第6図である。

銛頭の逆鉤のつき方は、両側／片側と分類されることが多い。しかし称名寺貝塚においては独特の逆鉤配置をもつタイプが存在するため、これを含めて四つに分類した（第6図上段）。片側一列（ア）のタイプは、縄文時代中期からみられ、称名寺貝塚からも出土する。小型の銛頭では主体を占める。両側対称（イ）となる資料はこの時期・地域にはあまりみられず、逆鉤の位置をずらして両側交互（ウ）になるのが一般的である。片側交互（エ）は、B貝塚からまとまって出土したタイプで、一段ごとにずれた位置に逆鉤が付いている。今回報告した資料はいずれも逆鉤部を残していないが、軸部の断面形などから考えて、1は片側交互（エ）、2・3は両側交互（ウ）だったと考えられる。

銛頭の基部は、柄への固定と離頭に関わる部分であり、繋索が結びつけられる索肩（ないし索溝・索孔）もこの位置に設けられる。縄文時代中期においては、基部は板状で索溝をもつ（第6図下段a）。称名寺B貝塚では端部に平面が作りだされて逆円錐台になる（同c・d）。索肩は浅く、繋索（銛縄）を通すための抉りが入る。基部の加工は丁寧である。今回報告した資料のうち、1はb、2はおそらくd、3はeに相当する。

1の基部形態bは、大型で基部端が鈍く尖り、軸の根元に段をもつ。これは称名寺A貝塚出土例（金子二〇〇九a、第52図1～3）と共通する特徴であり、他の地点からは出土していない。林氏の調査歴を考えると1もA貝塚出土である可能性が高く、称名寺式古～中段階に位置づけられる。2の基部形態dはB貝塚とC貝塚から出土しており、称名寺式新段階から堀之内式にかけてのものだと考えられる。3の基部形態eは、これまで称名寺貝塚からは出土例が知られていなかったもので、後期前葉・堀之内式期に位置づけられる。

称名寺A貝塚出土と考えた1は、B貝塚における「大型銛」よりもさらに一回り大きく、角幹部から角座骨にかけての部分を利用する素材取りが特徴的である。落角ではなく狩猟による獲物の角を利用していたことを示している。このような素材取りの類例は少ないが、三ッ沢貝塚や千葉県余山遺跡の出土資料（金子二〇〇九b）にも確認できる。

三ッ沢貝塚例は同じく林國治氏の採集による神奈川県立歴史博物館蔵品で、全長二二・一cmを測る大型品である（第7図）。逆鉤は「片側交互」（エ）の配置であるが、模式図に示したよりもさらに内側に巻きこむ。軸の根元はややくびれ、索肩には大きな抉りが入る。基部は逆円錐状を呈し、鈍頭で端部の平坦面はみられない。基部の組織が粗いことから、角座骨を利用したものと報告した（高橋二〇一一）。三ッ沢貝塚例は、基部形態や素材取りなどがA貝塚例と共通する一方、索肩の抉りをもち、軸下部の段がない点などで異なっている。型式学的には、bとcの中間、すなわちA貝塚とB貝塚の資料群の中間に位置付けられるだろう。

1の基部のサイズは三ッ沢貝塚例と比較しても遜色なく、やはり二〇cmクラスの超大型品だった可能性もある。特徴的な素材取りの目的は、より大きな銛頭を製作するためだったのだろう。角座骨も含めれば、より長い原材が得られるからである。片側交互の逆鉤配置も、緻密質の部分を利用してなるべく大きな逆鉤を作りだすためと考えることができる。つまり称名寺式古～中段階において、より大きな銛頭を製作するために、素材取りや逆鉤の配置が工夫されていたのである。

称名寺式期の漁具については、系譜を他地域に求める必要はなく、東

京湾岸域において中期の漁具をベースに独自に発達したものだと考えられる（金子二〇〇九a、高橋二〇一六）。今回新たに報告した資料により、その成立段階の様相をより具体的に明らかにすることができた。ただし、中期後半の銛頭からの変遷は必ずしもスムーズなものではない。この点については、より大型の銛頭を製作するために素材取りや逆鉤の形状などが急激に変化したものと考えているが、なお検討の余地が残されている。

（高橋）

おわりに

称名寺貝塚は古くから存在が知られ、多くの研究者により調査が行なわれていたことから、出土品は各地に分散して存在し、その全貌を把握するのは困難な状況であった。最近になり、それらの再整理が進み遺跡の詳細に踏み込むことが出来るようになってきた（横浜市歴史博物館編二〇一六など）。

当館の所蔵する資料についてはこれまでに土器、土製品の、今回は骨角器の報告を行なった。今後は石器や動物遺体等の整理、分析も継続して行なっていく予定である。

（千葉）

謝辞

本稿をまとめるにあたり石井寛氏、吉川久雄氏、上奈穂美氏、豊原熙司氏のご協力をいただきました。記して感謝申し上げます。

引用文献

金子浩昌　二〇〇九a「神奈川県横浜市称名寺貝塚出土の骨角器の形態と吉田格編年」『東京国立博物館蔵骨角器集成』東京国立博物館

金子浩昌　二〇〇九b「千葉県銚子市余山貝塚出土骨角器の研究」『東京国立博物館所蔵骨角器集成』東京国立博物館

金子浩昌・忍澤成視　一九八六『骨角器の研究　縄文篇Ⅰ・Ⅱ』慶友社

高橋　健　二〇一一「縄文時代漁労具の研究」『横浜市歴史博物館調査研究報告』七

高橋　健　二〇一六「称名寺貝塚の骨角製漁具」『称名寺貝塚と称名寺式土器』シンポジウム資料集

千葉　毅　二〇一五「神奈川県立歴史博物館所蔵の考古資料―林國治氏、小林小三郎氏旧蔵の横浜市称名寺貝塚採集資料―」『神奈川県立博物館研究報告（人文科学）』第四十二号　神奈川県立歴史博物館

横浜市歴史博物館編　二〇一六『称名寺貝塚　土器とイルカと縄文人』横浜市歴史博物館

吉田　格　一九六〇『称名寺貝塚調査報告書』武蔵野郷土館調査報告書一　武蔵野郷土館

本稿は、高橋が受けた公益財団法人三菱財団平成二十七年度人文科学研究助成「神奈川県横浜市称名寺貝塚の考古学的研究」による研究成果の一部である。